

語彙 (理論・現代)

田 中 章 夫

一、はじめに

近年、といつても、特に、この二、三年のことだが、国語教育の現場や学界で、語彙教育についての関心が、急に高まってきたようである。また、外国人に対する日本語教育の方面でも、やはり、語彙学習のための理論や資料を求める声が高くなってきた。従来も、言語情報処理の分野からは、コンピュータに入れる辞書の作成や、検索の効率化のために、主として、計量語彙論についての理論や語彙調査データなどが、しきりに求められ、国立国語研究所や計量国語学会などの手で、一九五〇年代から進められてきた、計量的な語彙研究は、それ相当の役割を果してきた。しかし、近年の国語教育や日本語教育の側からのニーズは、当然のことながら、きわめて基本的かつ広範なものであり、それに充分にこたえるためには、偏りがない、着実な語彙研究の進展をはかる以外に道はない。

こうした観点から、最近二年間の語彙研究の動きを見渡してみると、「着実な」という意味では、類義関係の分析や、語彙の意味的構造についての研究、あるいは位相論の方面に、力のこもった、すぐれた成果が集中したように思われる。しかし、「偏りのない」と

いう点では、はっきりいって、語彙に関する問題に、やや偏りすぎたように見受けられる。単に「偏った」というだけでなく、人により、対象により、さまざまな分析が繰り返りひろげられ、まさに、意味分析の手法のオンパレードの観があった。しかし、結果的には、語彙分析の、有効な手法の模索・考案・開発の面が中心となり、それを支える基礎理論には、ほとんど見るべきものがなかった。

全般的にみて、この二年間の語彙研究は、課題を限定してじっくり調べていく実証的な傾向が強く、理論的な考察も、従来の理論の見直し・集成に止まり、画期的な着想や、新領域の開拓には恵まれなかった。これは、あるいは、語彙研究そのものが、大規模な調査や、演繹的な問題提起を通じて、語彙の全体像を忙しく追い求めた時期を抜け出して、語彙の各部の実態や各面の性格を明らかにしていく方向に踏み出したものとみるべきかもしれない。その意味では、着実といえば、着実な二年間の歩みではあった。

ただ、研究対象にとりあげられている課題を眺めてみると、よくいえば、広範囲にわたり、悪くいえば、きわめて雑然としている。そのうえ、内容の面でも、学際的といえれば聞えはいいが、ちょっと言語の研究とは言いかねる、奇をてらったようなものも、少なから

ず見られる。これも、一つには、語彙研究のあり方を方向づけるような、先導的な考察や理論に乏しいためであろう。

こうした時期に、現時点における語彙研究の集大成ともいふべき『講座・日本語の語彙』（佐藤喜代治編、明治書院）の刊行が、八一年一月から開始されたことは、たいへんに喜ばしいことである。

また、八〇年から八一年の間に、各地の大学・大学院で、語彙論関係の講義・演習が、つぎつぎに新しく開かれるようになり、それにもなつて、卒業論文・修士論文にも、語彙論をテーマとするものが、かなり現われるようになってきた。これも、語彙研究の動向として、注目すべきことの一つである。

二、語彙の意味的構造に関する分野

この方面の研究で、一番の労作は、森田良行『基礎日本語2』（角川書店）である。一九七七年刊行の『基礎日本語』は、動詞・形容詞・形容動詞・助動詞・副詞など、活用語中心であったが、「前著の欠を埋める目的で（まえがき）」、今回は、名詞・代名詞・連体詞・接続詞・助詞など、主として、無活用語について記述されている。たとえば「まえ／うしろ・あと・のち／さき」とか「あるいは・または・もしくは」とか「あらゆる・みな・すべて」あるいは、「わたし・わたしたち／われ・わが・われら・われわれ／自分」など、さまざまな類義関係・対義関係が、丁寧に分分析されている。分析法も、前回の「基礎日本語」に比べると、ますます多様化し、洗練され、図示なども工夫され、一段とみがかかかって、精彩を放っている。この種のものでは、柴田武編『ことばの意味1・2』が、つとに有名だが、こちらの方は、討論の過程を経て、個人による偏

りを避け、標準的というか、安定した意味内容をとらえていこうという姿勢がみられる。それに対して『基礎日本語』の方は、著者個人の見方・感じ方・言語意識を徹底的に分析してみようという行き方であり、いふなれば、一種の名人芸である。この方法は、ともすると、独りよがりになる危険性は充分にあるが、本来、意味の問題は、個人々々で、さまざまに偏ったり、ゆがんだりしているのが、自然な姿であり、そうした、偏りやゆがみを含めて、一個人の見方・感じ方を徹底的に分析してみるとは、きわめて重要なことである。その蓄積が、語義や類義関係・対義関係の正確な記述のための、基本的な資料になるものと考えられる。その意味で、この二冊の『基礎日本語』に示された分析は、今後の語彙論・意味論の進展のために、貴重な試みである。

そこで、一つ希望を述べれば、ほぼ、すべての品詞にわたって、一通り記述を終えた、この段階で、この本の中に駆使されている、さまざまな分析法を、系統的に整理して、できれば、それぞれの長所・短所などにも触れてもらえたら、この方面の研究を志す、若い人たちなどに、この上ない指針となるのではないかと思う。

若い気鋭の研究者グループの手によるものとして、東京都立大学日本語研究会の機関誌『日本語研究』第3号（一九八〇年）・第4号（一九八一年）に連載されている「類義語の意味論的研究」は、注目すべき成果である。いずれも、学部・大学院の学生諸君が、動詞の類義セットを分担して、類義関係の分析を試みたもので、第3号には、この研究グループを指導した、中本正智の「火や熱に関する動詞の意味記述」も収録されている。

第3号には「おおう・かぶせる」「つつむ・くるむ・くるめる」

「はずす・はずれる」「およぶ・達する・つく・とどく」「たどる・つたう・つたわる・なぞる」「かがむ・しゃがむ・うづくまる」「よわまる・よわる・おとろえる」「みつめる・ながめる」「さめる・ひえる」のセットが、また、第4号では「つつむ・おおう」「まわる・めぐる」「はずむ・はねる」「かえす・もどす」「しがみつく・すがりつく・だきつく」「うつ・なぐる・ぶつ・たたく・はたく(はる・ひっぱたく、など)」「はぐ・そぐ」「きる・かぶる・はく」「あるく・あゆむ」「ける・ふむ」「さける・よける」のセットが、とりあげられている。このように、動詞を類義的なセットでとりあげた点は、「ことばの意味」に似ているが、分析は、担当者一人一人が、独自の方法で進めているので、その点は、さきの『基礎日本語』の行き方と同じように、個人の意識・見方に基づいた分析である。そのいい例が、第4号所収の、杉本武「さける・よける」と、鈴木正行「サケル・ヨケル」で、前者は、シNTAXスの上での、両語の性格・作用の異同を中心に考察し、後者は『ことばの意味1』の中の、長嶋善郎の説の批判の形で考察している。分析の過程においても、結論においても、両者が重なるところは、ほとんどないが、それだけに、この二つの動詞の、重要な差異を指摘している。同様なことは、田村公男「おおう・かぶせる」と、石井龍治「つつむ・おおう」と、服部貴義「つつむ・くるむ・くるめる」の三編についてもいえる。したがって、さきにも述べたように、同じ類義語セットについて、多くの人々の分析を積み重ねていくことは、有意義なことである。このことを、実例をもって示してくれた点だけでも、このグループの研究は、貴重な試みであった。

また、いうまでもないことだが、全体で二五人にのぼる研究担当

者が、くりひろげた分析法・図示法の競演は、まことに見てたえのあるバラエティ・ショーをみる思いがした。また、この種の研究の方法・分析方法は、模索と開発の段階であるうが、日下部文夫「語彙に構造があるか——関係体系をめぐって(大修館『講座・言語』第一巻所収)」は、類義・対義をめぐる意味構造の分析についての、重要な提言である。まず、「相関」の概念から説きおこし、「アガル・ノボル」「ハシル・アルク」「ヤル・モラウ」「フクラム・フクレル」「アツイ・サムイ・スズシイ」「ヌグ・キル」「ヤク・ニル」「アタマ・アシ」などのセットの意味の異同の様相を刻明に分析し、それを通して、意味構造に対する検証のあり方を論じている。そして、「そこに語の集合がある限り、なんらかの構造がないということはない、ありえない。語に語彙を背景とする構造がなくて、なんである文は成り立ち、ある文は成り立たないというようなことが起るだろうか。つまり、構文と語との間で、選択制限などがあることは、語の内一定の構造が定着しているからである。その点を手懸りとして、わたしたちは語彙を検証する」と述べている。

最近、語彙構造あるいは意味構造の分析と称するものの中には、しばしば、ことばを離れてしまったような、抽象的・観念的なものがみられるが、右の論文は、一部の、こうした傾向に対する警告としても、説得力のある発言である。

以上のほか、西尾寅弥「同義語間の選択についての調査」(群馬大学教育学部紀要・人文社会)29・宮島達夫「意味分野と語種」(国立国語研究所報告56『研究報告集・2』)は、どちらも、手堅い調査報告である。前者は、「カメラ/写真機」「ばれいしょ/じゃがいも」など26種の同義語セットをとりあげて、その選択意識を、東

京と大阪の老人・大学生を対象に調べたものである。一九六三年・四年に実施された、同種の調査（国立国語研究所報告28『類義語の研究』所収）との比較が興味深い。また、後者は、国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』の語彙調査の上位七千語の語種構成を意味分野別に調べて集計したもので、第一表は、それが、延べ使用率と異り語数の面から、第二表は語種比率の面からまとめられている。また、それに基づいて、意味分野と語種の関係を、こまかく分析するなど、たいへん精力的な成果である。

三、語彙の位相に関する分野

まず、幼児語について、国立国語研究所の、報告66『幼児の語彙能力』（村石昭三担当）と、報告69『幼児・児童の連想語彙表』（村石昭三・岩田純一作表）の、二つの報告書がまとまり、東京書籍から刊行された。前者は、一九六七年から三年計画で実施された「就学前児童の言語能力に関する全国調査」の中の「語彙能力に関する調査」についての報告で、「性状語能力」「時間・空間語能力」「動詞能力」の三つの面から、語彙能力の発達とその要因を調べている。幼児の語彙能力については、量的な調査は、早くから行われてきたが、その質的な面での発達を、全国的規模で調べた調査として、画期的なものといえよう。

後者は、一九七七年から七九にわたる、文部省の科学研究費による特定研究「言語生活を充実発展させるための教育に関する基礎的研究」の中の「児童の概念形成過程における言語の役割と言語教育の効果」の研究結果の一部であり、三歳から小学校4年生の幼児・児童を対象として、種々の意味的ジャンルについて連想語を記録し

たものである。とりあげたジャンルは、

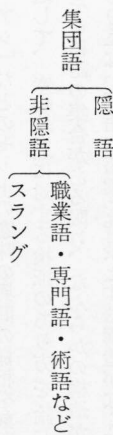
一九七七年が、「動物・楽器・植物・果物・道具」「魚・家・鳥・野菜・履物・家具」

一九七八・七九年が「動物・乗り物・道具・植物・家具・履物」

「花・果物・野菜・魚・鳥・楽器・虫」

であったという。表は、「東京調査語彙表」「鹿児島調査語彙表」「視覚障害児語彙表」「聴覚障害児語彙表」の四つの表からなり、いずれも、子どもたちの語彙の姿が、生き生きと写し出されている。言語教育の方面にはもちろんのことであるが、語彙研究の側にも、貴重な、基礎資料を提供するものである。

社会的な、各種の位相における語彙の様相を広くとらえたものに、渡辺友左『隠語の世界——集団語へのいざない』（南雲堂）がある。ここでは、まず、集団語というものを、



という形で把握し、集団語の実態・性格・成立要因などを説いている。内容は、「反社会的集団の隠語」として、娘師・非行少年の隠語を扱い、また、「非反社会的集団の隠語」では、デパート・警察・タクシー・鉄道・落語家・バーテンダー・僧侶の集団語が扱われている。さらに、職業語・専門語・忌詞・女房詞から、学生や若者のスラングに及び、巻末には、性をめぐる隠語も取上げられている。話題が広いので、啓蒙的ないしは、解説的な個所も多いが、巻頭の「集団語とはなにか」や、巻末の「性の文化のことば」などの

章は、言語社会学の観点から、語彙の位相差を論じた好論である。なかでも、「性文化と隠語についての事例的研究」は、著者が長年手がけてきた、性向語彙に関する調査をふまえて、読みごたえのある論文である。

これも、専門書というよりは啓蒙書の部類に入るかもしれないが、田中克彦『ことばの差別』（農山漁村文化協会）は、現代の言語の問題として、きわめて深刻で扱いにくい、この問題に、言語学の立場から堂々と取り組んだ点で、貴重である。いわゆる差別語の問題も、各所で扱われているが、特に、「Ⅱ、差別の意味」は、「差別語と日本語」「中央語と地域語」「天皇専用語」などをとりあげて、差別語における「差別」の意味と要因を、ていねいに説明している。一般の人々を対象とする本なので、ここでは、また、学問的に厳密な分析にはいたっていないが、この著者のような、広い視野と柔軟な見方で、この問題を、研究の対象としてとりあげることが、現在の重要な課題である。その意味で、現代の語彙研究に、問題を投げかける本であった。

また、流行語をめぐっては、この二年間いくつか目についてたものがあつたが、その中から、川崎洋『流行語』（毎日新聞社）をとりあげよう。毎日新聞・日曜版の連載を中心にまとめたもので、その意味では、きわめて通俗的ともいえるかもしれないが、二年間にわたって、その時その時の流行語を刻明に追いかけた記録であり、一語一語についての説明が新鮮な点で、他の追隨を許さないものをもっている。流行語の場合は、いうまでもなく、その発生の契機・要因を追うにしろ、当初の意味・用法をつかむにしろ、新鮮さが勝負である。時間が経ってしまうと、それらは、すべて、風化ないしは変質してしま

う可能性が少くない。時機を移さず追跡を重ねた一六五項目にわたる、流行語の生態描写は、量質ともに、今までに例をみない、貴重な記録であり、流行語研究に、確実な基礎資料を提供するものである。

つぎに、専門語について、国立国語研究所報告68『専門語の諸問題』（宮島達夫担当、秀英出版）がまとめられたことも、特筆すべき成果である。これは、学術用語・事務用語・機械用語・スポーツ用語などをとりあげ、現代日本語の語彙の中で専門語の占める位置を、さまざまな角度から明らかにするとともに、学術用語については、国際比較なども試みている。巻末に、「日英学術用語対照表」と「機械工学術語対照表」がついている。前者は、単なる日本語と英語の対照語彙表ではなく、その意味づけの有無とあり方についても比べている。後者は、一八八六年刊「工学字彙」から一九五五年の「学術用語集・機械工学編」にいたる七種の術語集についての訳語対照表である。本文における多角的な分析もさることながら、この巻末の二つの表は、専門語の特性と、その変遷を、みごとに描き出している。現代は、一般語彙の専門語化が著しい時代であるが、巻末の「専門語研究文献目録」をみても、真に学問的に、その性格や実態を考察しようなもの、ほとんどないといつてよい。その点で、今後の専門語研究の指針ともいふべき成果である。

四、その他の分野

以上のほか、外国語との対照研究の分野では、影山太郎『日英比較語彙の構造』（松柏社）や、論文集『日独両語の語彙体系の対照比較』（渡辺実ほか）などをはじめ、各種の研究がみられたが、この方面のものとして、最も興味をひかれたのは、三戸雄一・寛寿雄

編『日英対照擬声語（オノマトペ）辞典』（学書房）であった。日本語の擬声語・擬態語は、外国人に対する日本語教育において、難題の一つであるが、例文も訳文も、たいへん工夫されており、この難題に、風穴があいた思いのする労作である。

外来語関係では、石綿敏雄・飛田良文・村木新次郎・真田信治・工藤真由美・石井久雄・竹浪聡の共同執筆による『英米外来語の世界』（南雲堂）が、出色の成果である。江戸時代以来の、西欧語からの外来語撰取の様相を、食べ物・住まい・交通・通信・キリスト教・性・政治・経済など、さまざまな面から考察したもので、全体が、一つの近代日本語文化史論の趣きになっている。巻末の「外来語研究文献目録（飛田良文・中山典子編）」は、一八九一年から一九七九年までの、外来語辞典・論文・文献・評論を、編年体にとめたもので、外来語研究の進展に、大いに役立つことであろう。

樺島忠夫『日本語はどう変るか——語彙と文字』（岩波書店）は、日本語の語彙の性格・特徴・現状をとらえたいうで、語彙と文字の将来を展望したものが、文字についてはウエイトが軽く、内容は、現代日本語語彙論といってさしつかえない。「Ⅰ、語彙とは何か」から説きおこし、「Ⅱ、日本語語彙の形成」では、意味的組成や語種構成の特性に触れ、「Ⅲ、基本語彙の性格」に続く。このあたりは、どちらかというと、解説・紹介が中心だが、そのあとの、「Ⅳ、古い語と新し語」「Ⅴ、語の情報機能」の二章は、たいへん新鮮な内容である。たとえば、日本語の伝統的なリズムが、現代の用語では保ちにくいことや、品詞比率についての、「樺島の法則」（『岩波講座・日本語』9「語彙と意味」の中の「2、語彙の構造的構造」参照）の、適用例から、文章における語（品詞）のランクづけができて

ることなどもとりあげられている。そして、「Ⅳ、日本語の将来」でしめくくられているが、語彙の面から、現代日本語を眺めたものとして、多くの日本語論の中で、異彩を放つ存在である。

異彩中の異彩というべきものに、林大監修『図説日本語』（宮島達夫・野村雅昭・江川清・真田信治・佐竹秀雄編、角川書店）がある。これも、内容は、語彙とは限らないが、語彙論に関する図表が、その解説とともに、数多く収録されている。編集の主旨が、何でもグラフ化してみよう、というところにあったよう、グラフによる、日本語研究の集大成である。原著のグラフを統合あるいは補正したものや、原著の記述を新たにグラフ化したものもあり、編者の苦労がしのばれるが、語彙論の展望には、この上ない本である。

グラフの話が出たところで、計量語彙論に目を向けると、水谷静夫『数理言語学』（培風館）の中の「2、集合としての語彙」「3、用語の類似」の二つの章は、語彙論の基礎理論の検証という意味で、やはり触れるべきものと思う。前者は、語彙の定義にはじまり、ジップ（G. K. Zipf）以来の、語彙の分布の諸法則を、実例に即して検証したものである。その中の、使用率分布の検証は、著者の「語の使用率分布函数の算定」（『計量国語学』12—8所収）が、下敷きになっている（著書でも、この論文でも、例題に引かれている、「蜜柑」などの用語調査は、『国語学研究法』（武蔵野書院）からの引用となっているが、これは、国立国語研究所報告49『電子計算機による国語研究Ⅴ』の一四五ページ以下が、オリジナルである。右の『国語学研究法』の編者からは、出典名が脱落した旨、刊行直後に連絡があった）。「3、用語の類似」は、相異なる語彙群、たとえば、二つの作品の語彙とか、作家・歌人一人々々の語彙とかいったものの間の、共通

単語の現われ方についての調査法・分析法を論じたものである。例題としては、古典物語・近代歌人・歌謡曲の語彙がとりあげられているが、歌謡曲については、著者の「用語類似度による歌謡曲仕訳『計量国語学』12-4」や、著者と松盛千佳による「同一素材歌謡曲の用語類似度『計量国語学』13-4」にも、くわしい分析がある。語彙について、理論を立てたり、それを検証したりすることは、コンピュータの助けを借りるにしても、たいへんな労力がかかるばかりでなく、立証のプロセスを、わかりやすく記述するのも容易でない。この本で、著者が試みた、例題による方法は、話が具体的で、すくなくとも、読み手の負担を軽くすることだけは、たしかである。同時に、この本の場合、例題にとりあげられた問題は、いずれも、一つ一つばらばらに論じられてきたものであるが、それが、関連づけられて配置されたことは、これからの研究にとって、たいへんありがたいことである。

最後に、国立国語研究所報告70『大都市の言語生活』(三省堂)に触れておく。これは、東京と大阪を主たる対象として、大都市住民の、言語生活の実態と意識を研究したものであるが、その第5章「語彙・文法の実態」では、現代語の語彙をめぐる諸問題について、数々の、興味深い調査結果が報告されている。たとえば『あさっての翌日』と『あさっての翌々日』(佐藤亮一)によれば、標準形とされる「シアサッテイヤノアサッテ」のタイプは、東京出身者でも四〇%にすぎなかったという。また「可能表現をめぐって(同)」では、「見レル・起キレル」の進出などを扱っているが、これは、「東京よりも大阪で目立つ」としている。「副詞及び方言的な言い方」(沢木幹栄)によると、「ものの値段を聞く時」の言い方は、大阪で

も、すでに「ナンボ」は、わずか一九%、「イクラ」が五五%となっている。「サ変動詞をめぐって」(真田信治)には、「察スル―察シル」「感ズル―感ジル」「愛スル―愛ス」では、東京・大阪とも「ル」型が多いという結果が出ている。

言語地理学的なものをのぞいて、語彙についてのフィールドワークは、あまり行われていないようであるが、ここに報告されている結果をみると、現代語の語彙の研究として、この面からの開拓を、一層、進めていく必要があるように思われる。

五、おわりに

今回の展望は、編集部重点主義という方針にしたがって、語彙研究の分野別・問題別に、一点ないし二点ずつとりあげ、この二年間の動向を追ってみたつもりである。

現代語の語彙研究を重点的に展望するとなると、ある程度、まとまりのある、語彙らしい語彙についての研究が、まず中心になる。

その結果、本誌の論文でいえば、一二〇号所収の「併存する自動詞・他動詞の意味」(須賀一好)のような、特定の品詞に関するもの、あるいは、西尾寅弥『擬音語・擬態語十する』の形式について『語学と文学』20)のような、語の形式に関するものには及ぶことができなかった。

また、語彙に関連するものというより、むしろ語彙研究に重要な資料を提するものとして、辞書・用語集・用例集・索引などもあつたが、これも割愛せざるをえなかった。

この点は、御了承いただきたい。